

教育実習に関する課題について

— 学生の意識調査から —

相良 麻里

(平成 16 年 9 月 30 日受理)

On Some Problems Concerning the Teaching Practice

— Based on the Survey of Students' Attitude —

SAGARA, Mari

(Received on September 30, 2004)

キーワード：教育実習，学生の意識調査，教員養成

Key words : teaching practice, survey of students' attitude, teacher training

はじめに

本学は私立の女子大学において取り分け教職課程の履修者が多く、これまでに多くの教員を輩出してきている。教職課程を履修している学生の割合も、少子化に伴い教員採用試験の募集人数が少なくなってきた近年においても以前高い水準を保ち続け、毎年教育実習に送り出す学生は400名を大きく超える。また、1998年教育職員免許法の改正に伴い、教員免許を取得する為の単位数が大幅に増えることになった。そして1997年立法化され施工された「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に関する教育職員免許法の特例等に関する法律」により介護等体験という新しい学外で行われる体験も加わり、教育実習の期間も従来2週間行えば良かった教育実習が3週間～4週間と実習期間が延長されている。この教育実習を含む教職課程の単位の増加は、大学にとっても教員免許を取得する学生にとっても多くの困難な問題をもたらした。こうした状況の中で本学における教員養成も大きく影響を受けており、教員養成のカリキュラム、指導の充実が一層求められている。

教育実習は教育職員免許を取得する為に必要な最も重要な科目であり、教職課程を履修する学生にとっては、今まで大学で学んできた教科教育法、教育理論等を学校という教育現場で初めて実践するものである。そのため教育実習期間中、学生は毎日が努力と緊張の日々を過ご

し、教育実習前と教育実習後と比較すると見違えるほど成長をとげる。本稿では、教育実習を終了した学生に意識調査を行い、学生が教育実習をどのように捉え、実習を通して何を学び取ってきたのか考察したい。また、教育実習を体験した上で感じた問題点等を検討し、今後の教育実習のオリエンテーションに資することを目的としたい。

2 調査概要

1) 対象

平成16年度教職課程履修者の内7月までに教育実習を終了した家政学部(中・高教員免許履修者)4年生157名。

2) 実施時期

2004年7月

3) 調査方法

「教育実習の研究」の事後指導時、表1に示すような項目に関して質問するアンケート用紙(資料I)を調査対象者に配布し、1週間後に回収した。なおその際の教示として、回答内容は学生自身の成績評価に関わるものではなく、次年度以降の教育実習の実施及び指導に生かすための資料としてのみ使用されると伝えた。

表1 意識調査における質問項目

-
- I 教員免許を取得しようとした理由
 - II 将来の進路について
(一般企業、公務員、教員、大学院等進学、その他)
 - III 実習の満足度とその理由
 - IV 実習して良かったこと
 - V 実習の問題点
-

注： 上記のうち、問IIは多肢選択法（複数回答可）、問IIIの満足度については「満足している」、「やや満足している」、「普通」、「やや不満である」、「不満である」の5件法による回答、そしてそれ以外は自由記述により回答する項目である。

3 結果について

本研究においては、調査対象者全員からアンケートが回収できたため、全ての回答を考察の対象とする。

以下では各項目ごとに回答結果の概要を示す。

I 教員免許を取得しようとした理由

自由記述による回答のため、個々の表現は様々であるが、大別すると表2に示すような理由が見られた。なお表2に挙げた理由以外にも、いくつか回答が見られたが、それらは「何となく」のような特に理由とは判断できないものであった。

II 将来の進路について

この項目では、複数回答を可として回答を求めた。選択肢ごとの回答数を表3に示す。

III 教育実習の満足度とその理由

満足度に関して「満足している」、「やや満足している」、「普通」、「やや不満である」、「不満である」の各段階ごとの回答数を表4に示した。またその回答に基づき調査対象者を5群に分け、それぞれの群における主要な回答理由を表5～表9にまとめた。これについてはIと同様、理由とは判断できないような回答については、表に掲載しなかった。

IV 教育実習をして良かったこと

教育実習をして良かったと感じた点についての回答結果の概要は、表10に示した。

V 教育実習の問題点

教育実習をして問題を感じた点についての回答結果の概要は、表11に示した。

表2 教員免許を取得しようとした理由

1	教員になりたいから
2	将来何かの役にたつかもしれないと思ったから
3	在学中に何か資格が欲しかったから
4	親からすすめられて
5	幅広い知識と経験を得たかったから
6	自分に自信をつけるため
7	教育に対して興味があったため
8	栄養教諭になりたいから
9	学校図書館司書になりたいから

表3 将来の進路希望(複数回答)

	人数
一般企業	88
公務員	12
教員	56
大学院進学	8
その他	29

表4 教育実習の満足度

	人数	%
満足している	79	50.30%
やや満足している	59	37.60%
普通	9	5.70%
やや不満である	8	5.10%
不満である	2	1.30%

表5 満足している理由

1	貴重な体験ができたから
2	充実した毎日を過ごすことができたから
3	教育実習校にて先生方に十分に指導してもらえたから
4	教えることの楽しさを知ったから
5	様々な意見や技術を頂くためになったから
6	生徒とふれあうことができたこと

表6 やや満足している理由

1	反省点があるから
2	自分がやり残したことがあるように思うから
3	もっと生徒とふれあいたかったから
4	道徳の授業がうまくできなかったから

表7 普通の理由

1 貴重な体験ができたから
2 充実した毎日過ごすことができたから
3 教育実習校にて先生方に十分に指導してもらえたから
4 教えることの楽しさを知ったから
5 様々な意見や技術を頂くためになったから
6 生徒とふれあうことができたこと

表8 やや不満であるの理由

1 研究授業がうまくできなかったから
2 指導教諭からのしっかりとした指導がなかったため
3 生徒とふれあえなかったから

表9 不満であるの理由

1 指導教諭が指導してくれなかったから
2 教材研究不足

表10 教育実習をしてよかった事

1 自分が教師の立場に立ち先生の大変さがわかった
2 人に教えるという責任の重さ
3 教えるという楽しさ
4 教えるという難しさ
5 生徒と直接関わり実際の教育現場を見ることができた
6 自分自身を見つめ直すことができた
7 人前に出る苦手意識が克服できたこと
8 知識が広がったこと
9 学ぶ大切さ、コミュニケーションをはかることの難しさがわかったこと
10 人のために頑張るということがわかったこと
11 社会の礼儀・マナーを知ることができた

表11 教育実習の問題点

1 指導教諭からの指導のありかた
2 専門知識不足
3 授業中の生徒の態度への対応
4 生徒理解の難しさ
5 実習期間が短い
6 学習指導案の書き方が未熟

4 考察

教員免許を取得しようとした理由

教員免許を取得しようとした理由（教職過程を履修しようとした動機）は様々であるが、教職課程履修の履修動機は主に4つに分類することができた。

- 1、教員になることを将来の進路選択として履修時に決めている学生。
- 2、教員になることを将来の進路として決めているわけではないが選択肢の一つとして資格を取得する学生。

3、全く教員になる意志はないのだが大学に入学したのだから資格だけ取得したい学生。

4、親にすすめられて資格を取得する学生。

上述のように今回の調査において4つに分類された結果は学生指導の場面において受ける質問内容と一致している。詳しく見てみると教員になりたかったからという回答が最も多くあり、将来教員を志望する学生の人数が潜在的に多く存在していることが読み取れる。

また、卒業後の自分の進路との関わり合いの中で、教員免許を取得したいと考えている学生もかなりの人数であった。これは、今日の就職状況が厳しいことから、学生は入学時に卒業後の自分の進路のことまでしっかり考えた上で履修しているからであると推測される。

将来の進路について（複数回答）

将来の進路については一般企業に就職を希望する学生が最も多い回答であり、次に教員が挙げられる。表には記載していないが一般企業と

教員という掛け持ちの回答が23名あった。やはり、昨今の教員採用試験が難しく、都道府県によっては募集人数も一桁台と非常に厳しいものになっているため、就職浪人をしないためにも掛け持ち受験をせざるおえないのであろう。大学院進学希望の学生も卒業後は教員を目指したいという回答が多く見られた。

また、教育実習後に以下のように将来の進路について影響を受けているものも多く、4つのタイプに分かれている。

- 1、教員になりたいという意志が強固になる。
- 2、教員になりたいという意志がなくなる。
- 3、教員になる意志はなかったが教員になる意志が強まる。
- 4、教員になる意志は初めからなく、実習後もその意志は変わらない。

本学の傾向としては1, 3, のタイプが多く、2はごく稀なケースである。卒業後の進路の動きを追跡調査することにより、より動向がはっきりするであろう。今後の検討課題にしたい。

実習の満足度

実習の満足度では「満足している」が最も多く「やや

満足している」が次に続く。

「やや満足している」に○をつけた理由としては実習の内容には不満がなく満足していたのだが、学生自身が自己評価をした場合に反省点があるため、満足度のランクを下けている回答が多くみられた。これは「普通」と回答した学生も同様の傾向である。しかしながら、「やや不満である」「不満である」と回答した学生の理由は特徴的だ。もちろん自己反省点も記述されていたが、指導教諭との関わりあいがかうまくいかなかったケースが多く含まれる。教育実習は指導教諭の指導力、人柄によって実習する内容にも多大な影響を与えるものである。よって指導教諭との関わりあいにおいて問題を抱えた学生は教育実習そのものに不満の残る結果となっている。

全体を通して見てみると教育実習に前向きに臨む姿勢が「満足度」の評価の違いに影響を与えているのではないだろうか。表には表してはいないが将来の進路について教員を希望している学生の教育実習への満足度は概ね高い傾向にある。教員を希望しながら「不満である」と回答した学生には不満を感じる要因はあったにせよ進路変更を考えてはいないことから自己を厳しく評価したための回答であろう。

教育実習をして良かったこと

教育実習をして良かったことでは生徒との実際のかかわりの中で感じた内容が多く挙げられている。これは大学で学んだ教育に対する理論を初めて教育の現場で実践することにより、大学の授業を通してだけでは容易に得ることのできない体験・経験ができたためであろう。それは教育的な能力・訓練が生徒との関わりの中なかで集中的に能動的に行われたことを意味し、多くの学生が教育実習の意義、すなわち理論と実践の結合学習を達成していると考えられる。

また、教育実習を通して社会との関わりや自己の適性・洞察を深める契機となった学生もあり、自己省察の場として教育実習は意味深いものである。

さらに、教師の立場・生徒の立場を客観的に観察することにより人間としての基礎教養を培う自己形成の場になっていることも推測できる。

実習の問題点

実習の問題点では、専門知識の不足、教材研究不足が多く挙げられていた。大学の授業の中では、それぞれの

担当教員が丁寧に取り上げて指導をしている。しかしながら学生の授業へ取り組む意欲によって知識・技術の習熟度にどうしても差異が生じる。今後、学生の意欲を高めるためにオリエンテーションの際に何らかのアプローチの方法を検討する必要があるのではないだろうか。今後、学生指導においても教育効果を上げるために文献、資料、などを充実させ適切な時期に効果的に提示していくことも必要であろう。

また、指導教諭からの指導のあり方・生徒との関わりに戸惑う学生も多く存在することが回答から読み取れる。教育実習は教育の実現場とそこにおける教師・生徒という人間の活動の場で行われているものである。教育実習にでる前に教育実習生という立場を今一度明確にし、人間との関わりーコミュニケーション能力に視点を向けさせることに留意していきたい。

おわりに

本稿では教育職員免許法改正後の次年度に入学した学生に対して教育実習終了後に意識調査をすることにより、今後教育実習のオリエンテーション・学生指導を行う上での新たな課題を探るために調査を試みた。

学生は教育実習を通して様々な経験を積み多くの事柄を学び・考え、習得していることが回答より読み取れた。学生は様々な場面において指導教諭・生徒と接し・関わる中で迷い、悩みながらも確実に何かをつかみとって大きく成長したことがうかがえる。それはまさに青年期の重要な発達課題、アイデンティティーの確立に向かうものである。

本来、教育実習の意義は理論と実践の統合を求める重要な学習過程であると考えられている。しかしながら学生の考える教育実習の意義は多岐にわたり、教員になるための適性について自己診断をすること、現在の学校・教育を内側から理解する機会であること、生徒とのふれあいを通して自己を見つめ直す場であること、社会経験ー職業倫理を培う訓練の場であること、など広がりを見せている。

すなわち、学生の考える教育実習は単に教員になるための実践の場だけではないのである。教員への志向の有無にかかわらず個々がそれぞれ教育実習に多面的な意義を見いだしており、それは個々が実習を通して様々な課題をみつけ主体的に追究・解決してゆく過程の中で意識されたものである。更にいうならばその意義は今後の生

き方を省察し進路選択をする上での貴重な選択基準になっていると考えられるのである。

これからの課題としては今回の調査でみられた学生の意識を今後更に吟味・再検討し、教育実習を教員になるためだけの科目として指導するのではなく、学生自らの人間の発達を視点を加えたオリエンテーション・学生指導の在り方について考えていきたい。そしてこの新たな課題をふまえ、本学の伝統である教員養成教育を主体的・個性的に創造・確立していくことが重要になってくるのではないだろうか。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり学生への調査表の配布・回収等にご協力頂きました教職指導室の中島絹子先生、渡辺崇子先生、藁谷奈津代先生に深く感謝申し上げます。

参考文献

1. 鈴木慎一著 「教育実習論」南窓社 1972
2. 右島洋介・鈴木慎一編著 「教師教育－現状と課題」勁草書房 1984

Summary

The aim of the present study is to examine how university students consider the teaching practice and what they learn from the practice. The result of the attitude survey of 157 students who had completed their practices showed that the students had learnt social skills, insight into themselves, and fundamental knowledge of the community from their teaching experience. Further issues related to the student guidance aimed to encourage their humanistic development was found to be discussed.

資料 I

下記の質問にすべて答えてください。

学籍番号

氏名

1. 教員免許を取得しようと考えた理由は何ですか。

2. 将来どのような道に進みたいと考えていますか。
 - 1 一般企業 3 教員 5 その他
 - 2 公務員 4 大学院等進学

3. 実習を終えて将来の進路を考えるうえで変化はありましたか。

4. 自分の将来とこの実習をどのように結びつけて考えているか記述してください。

5. 実習を終えてあてはまるところに○をつけて『』に理由を書いてください。
満足している やや満足している 普通 やや不満である 不満である
「

6. 実習して良かったと感じた点を列挙してください。

7. 実習して問題を感じた点を列挙してください。

8. そのほかに気づいた点があれば自由に記述してください。